

# 妄言多謝

内山政照

はじめて社会学会をのぞいた私は、コマ切りの報告と顔見知りの人がいないこととで、さびしい気持ちになっていた。村研はしかし、一おうまとまった報告をきくことができ、有賀先生始め旧知の方々も若干あったので、ホッとして救われたような気がした。村研は労働組合のような新鮮な空気にみちていると誰か言ったが、たしかにそういう意気込みと気分とがみなぎっていることも、うれしかった。

そこで組合員を気どって感想を二つ三つ、  
一、報告の仕方について、「御承知のとおり」という調子で、報告の基本モチーフに当るところをばしてしまい、ネータを並べてあとは夫々の「御承知」に従って解釈してくれ、というのは困る。おはすかしいことだが、実はあまり「御承知」してないからである。もっと率直に照れ臭がらずに、書生流の仮説推断を出してほしい。ネータをその焦点にしぼって欲しい。このためにはしかし、やはり会員お互に「貧しさもの」の自由な交流ができるような、人間関係ができれば、それが前提条件なのであろう。例えば懇親会が前日にもたれるのもその一工夫。

二、独自の方法について、村研はその趣

意として、「村落」を研究対象とする限り、多く各専門研究者をつむむことをうたっている。しかし、このことはお互の方法の独自性（従って限界）をすて、ということをも意識しない口ずである。歴史も経済も社会もゴツタ煮で、「村落」を研究すればよいというのではないはず。社会学者ならせそれなりに独自の、他の研究者にない方法で終始一貫すべきだ。こうした覚悟が十分であつたらうか。（或いはこのことに反対の方もいるであらうが）

「ひとが個性をもつこと深ければ深きほど、真の己の自分自身が形づくられる可能性が大きくなる、かゝる基礎なくしてつくられた共同体ありとしても、それは、Community Day なものにすぎない。」

最後に、白髪のお先生がたのますくさかんなエネルギーと、ナイーブな精神は、他の学会に類稀れ、心あたままる村研の源泉。及び地方の町々に散らばり、仙台に集まれる研究者の方々の熱意。これらは私如き者二才に上つて最大のシツタの報であつた。深い敬意をさしげ度い。

（農林省農林総合研究所）

